

Title	ブライアン・テュー著 傍島省三監修, 永島清・片山貞雄訳 国際金融入門 : 国際通貨協力の理論と現状
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.360(90)- 361(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19640401-0090
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

めあげ、主要問題点を概論的にとりあげたすぐれた著作であり、これをテキストとして講義による補足、問題点のより進んだ究明を行なっていくのが最適であるように思われる。

以下、本書の主要な構成・内容を手短かに列挙する。第一に、第一編国際金融の基礎、第二編国際為替金融市場の機能、第三編国際通貨制度の変遷、第四編国際通貨制度の新しい動向、という構成からも判るように、国際金融を理解するのに必要な基礎的な実務から出発し、逐次理論や制度に進む方法がとられている。すなわち、一般業者間の債権債務(個別的な為替取引)↓為替銀行の利用↓銀行間取引(持高調整・資金調整)↓為替金融市場↓政府中央銀行の保有する最終決済準備↓国際金融市場・国際通貨制度といった関連ないし順序に、論述が進められている。この個別的な為替取引から出発しての国際金融の構造・理論への接近方法は、本書の一つの特色であり、教科書として本問題を理解するための最善のものであるということができよう。第二に、「国際金融」とは、国際間の取引(財貨・用役・一方的・資本等)に伴う国際間における資金ないし貨幣的購買力の移転現象をいい……その課題は、一言でいえば諸国際取引の潤滑油たる役割を担うべきである。

……諸取引の拡大に應ぜられるように貨幣金融の場を提供することが国際金融の使命であり、その原理を究明することが国際金融論の究極の課題である(二一四頁)と規定され、外国為替の機構に中心を置いて、究明がなされている。かかる問題の規定から当然、外国為替取引については国際收支の自発的な真の意味での均衡(国際均衡と国内均衡の同時達成)が目的として設定される。ここに前者の分析と本書のそれとが全く盾の両面関係にあることが理解される。第三に、国際為替金融市場のメカニズムとして、為替相場の変動と金利とが重視されて、分析されている。第四に、国際通貨制度の現在における根本的課題は、国際通貨の弾力的供給と価値の安定維持にあるとし、この課題達成のために本書の過半をさいて過去の代表的な国際通貨制度(国際金本位制度・管理通貨制度)を検討し、第二次大戦後の国際通貨基金、ドル不足からドル危機への転換を探り、国際通貨制度の理想を追求している。

本書は、このように、新しい研究内容・問題点の指摘といったものは殆んどなく、むしろそのまともな方に特色をもち、これまでに確立された理論や制度、さらには、最近における国際通貨制度の改革の動き迄を巧みにとり

そろえた格好の入門書・テキストである。しかし、この個別的取引から出発する研究方法のもつ有用性と意義は認められるけれども、逆に総括的な世界経済構造論的な、ないしは実物的な接近とどう関連させていくのか、国際金融の構造と理論とは一体何であるのか、とくに国際金融の理論体系が存在しないし確立しているか否か、長期資本移動の問題にも言及する必要があるのではないか、といった疑問が一読した限りで感ぜられた。恐らくこれらは評者の理解ないし読みの不足によるものであり、さらに土屋教授が序文で約束されているように、「世界経済の決済構造」に関する研究成果の発表によって解明されるであろう。教授の弛まざる御研究に心から敬意を表するとともに、そのますますの深化発展を祈ってやまない。(日本評論新社・昭和三十八年十二月刊・A5・三一六頁・一〇〇〇円)

— 深海 博明 —

ブライアン・テュー著
傍島省三監修、永島清・片山貞雄訳

『国際金融入門』

— 国際通貨協力の理論と現状 —

本書もまた、土屋教授の著書と同じく、国際金融に関する入門書ないし教科書である。訳者序文にも記されているように、より限定された意味においてではあるが、国際通貨協力の理論と実際(とくに第二次大戦以後)を展開することを目的とし、この分野の数少ない著書の中にあつて標準的テキストとしての地位を確立している。

その構成は、第一部基本的諸原理、第二部国際通貨協力の機構、第三部大戦以来の事件の経過、の三部よりなる。これらは、本問題に関する三つの接近方法、すなわち理論的・制度的・歴史的のそれぞれと対応しており、とくに前の二つに重点がおかれている。第三部は、主として、制度的機構のある適切な革新(多分トリフィン計画の線に沿う)きたる二・三年以内に導入されるのでなければ起るかもしれない重要な問題を歴史的背景のもとに説明する目的をもっている。

本書の主要内容・特徴を手短かに以下に列挙する。第一に、問題の限定として、本書の題目の通貨という用語は「勘定の決済に関する」という狭い意味で使用されており、この目的を主題としない国際資本移動は対象外におかれている。さらに過去の歴史となった事件だけを取扱ひ、最後の第十五章においては

じめて、将来への若干の展望がなされているにすぎない。第二に、基本的諸原理において、国際間取引の特殊性を明確化した上で、分析を①対外流動性の問題、②対外不均衡の問題、③不況波及の問題、に焦点を絞り、以後これらとの関連において、今次大戦後の展開(とくに制度・機構)が、一貫して分析されている。第三に、著者がイギリス人であることから、国際通貨協力はイギリスの立場、ひろくいってヨーロッパの立場からするものを中心としている。したがって、第八章のヨーロッパにおける通貨協力の分析、さらにはとくに第十章のスターリングに関する詳細な分析は貴重であり、本書の重要な特色となっている。第四に、現存の制度の改革に関しては、金ないしドル為替本位制度の欠陥を明確に指摘し、現存の制度は急速に成長する生産と貿易を伴う世界にとっては不適切であり、トリフィンの考え方・計画に全面的な支持を与えている(二一八―二二七頁)。

かように、本書は問題をはつきりと限定し、今次大戦後における国際通貨協力の関し、とくにその制度的・機構的分析を中心とするすぐれた小冊子であるといえよう。この意味において、一読をお奨めしたい。しかし

国際金融の体系的分析・理論といった観点からすれば、当然、前の土屋教授に対するのと同様の不満・問題点が指摘できるであろう。とくに国際決済がスムーズに行なわれるための条件・機構の探求に終り、さらに一歩立ってその奥に存在する世界経済の実物面・構造面の分析との結びつきが殆んどなく、かつ、国際金融の基本原理の究明もまた、ただ三つの問題を抽出するだけに終り、不十分であることが問題であろう。根本的にいって、国際金融の体系的理論とは何であり、現在の世界経済の進展状況からみてそれが確立可能であるか否かに関してすら論議がなされ、明確化されていないように思われる。最近における国際金融問題に関する関心のたかまりを契機として、かかる研究をますます突き進めていくことが望まれる。なお本書と同一方向の一層詳細な研究を志す人々は、W. M. Sammel, International Monetary Policy, London, Second Edition, 1961. を参照された。原書は Brian Tew, International Monetary Co-operation 1945~60, 6th Edition, 1962. (東洋経済新報社・昭和三十八年十二月刊・B6・二二二頁・六二〇円) — 深海 博明 —